九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

荻生徂徠『護園随筆』の反響

大庭, 卓也
日本学術振興会特別研究員

https://doi.org/10.15017/8984

出版情報：文獻探究. 40, pp.53-58, 2002-08-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

荻生徂徠『蘐園随筆』の反響

大庭卓也

正徳四年に刊行された荻生徂徠『蘐園随筆』は、後年、徂徠自身、本書の見解が朱子学的思惟に立脚していることを恥じたにもせよ、徂徠独自の儒学説、所謂「徂徠学」に通じる主張を盛り込みつつ伊藤仁斎を痛烈に批判した点において、近世思想史上、看過することのできない書物である。しかし、本書の意義は単に仁斎批判という一点のみに留まるものではない。巻五に置かれる『文戒』において、漢文で文章を記す際の「和習」という問題を意識的に論じて学界に提示した点は、漢文学研究において屢々引用される那波魯堂『学問源流』（寛政十一年刊）などに特筆されるところでもあり、文学史の上から見ても決して小さな出来事ではなかった。そのように考えて、以下、新旧の思潮交替が著しい正徳騒壇にあって、かかる問題提起がなされたことの意味と、それが投げかけた波紋とに検討を加えておきたい。

一　『蘐園随筆』刊行の文学史的意義

『文戒』の執筆意図は、中国語と日本語は根本的に異質な言語であるという事実を示す点にある。即ち、「和字」「和句」「和習」の三基準を設けて、同時代の学者たち、伊藤仁斎・山崎闇斎・独庵玄光の三人の文章を検証し、いかに日本語的な要素を混在させて漢文が綴られているか、そうした不備のある箇所を逐一あげつらい、糾弾していったのである。材料として用いた文章は、

仁斎…『語孟字義』（贋刻本元禄八年刊、宝永二年刊）、『童子問』（宝永四年刊）、「送荒川景元序」、「詩説」、「儒医弁」、「圧書小紫石記」、「送片山宗純序」、「青山石銘」。

闇斎…「贈山休序」、「湯武革命論」、「世儒剃髪弁」、「近思録序」

玄光…『溲勃』（元禄四年序刊）

であり、糾弾する回数は、仁斎に関するものが圧倒的に多い。では、彼らの漢文に所謂「和習」が多いのは何に起因するのか。徂徠はその元凶を「和訓顛倒ノ読」（訓読）と「講釈」に求める。漢語に元来、言語体系が異なる和語の「読み」を適宜宛ててゆく訓読は、正確な漢語の意味把握を阻むものである。また、漢語を聴者の耳に入り易く意訳的に解説してゆく講釈も同様である。訓読と講釈、これら二者に幼時より習熟するため、正確な漢文が綴れないと結論づけるのである。以上、『文戒』冒頭の「徂徠先生口語」および、その方法論を説いた『訳文筌蹄』（正徳四～五年刊）「題言十則」などに見えるところの要

約である。『護園随筆』巻二には、叙上のような論旨を、『文戒』の執筆意図と関連付けるかたちで次のように簡潔に述べる。

文字ハ皆、華人ノ言語ナリ。此ノ方ハ廼チ和訓顛倒ノ読有リ。是レ和語ヲ華言ニ配ス者ナリ。而シテ中華、此ノ方ノ言語ハ、本ヨリ自カラ同ジカラズ。得テ配スベカラズ。故ニ此ノ方ノ学者ノ字義ヲ知ラザルハ、皆此ニ由テ累ヲ作ス。仁斎ガ聡明ト雖モ、亦タ未ダ免レザル所ナリ。蓋シ、其ノ幼ヨリ習読スル所、知覚セザルノ中ニ痼スル者ノミ。而ルニ洛下ノ諸生、皆仰グコト山斗ノゴトクシ、其ノ書ヲ服習シ、其ノ言ヲ模楷トス。廼チ此ノ眼ヲ移シテ、以テ中華ノ書ニ向フハ、其ノ害、豈ニ尠カランヤ。我ノ「文戒」「文罫」ヲ作ル所以ナリ。（原漢文）

「文罫」は『文戒』の初稿と推定されるもの。[註1] ここでも、御多分に漏れず仁斎を名指しで批判しており、『文戒』執筆の動機がそのまま、仁斎批判に結び付けられる所以であろうが、徂徠の批判の矛先は、「和訓顛倒ノ読」を重んじ「中華ノ言語」の「字義ヲ知ラ」ない「此ノ方ノ学者」即ち、同時代の学者全般に向けられていることを確認しておかなければならない。あくまで仁斎はその一代表なのである。

それを明証するのが、徂徠の二六九にもおよぶ批語が書入れられた『榑桑名賢文集』（九州大学附属図書館萩野文庫蔵）の存在である。『文戒』は、仁斎・闇斎の文章を掲げる際、そのテクストは何に拠ったのかを註記するように、その多くは他でもない『名賢文集』本文を利用していた。『文戒』における二人の文章に対する論駁の殆どは、萩野本にも同趣旨の批語があり、その他、徂徠周辺の人物の証言よりして、この萩野本批語は、『文戒』執筆時の覚書に相当する点、また徂徠は『名賢文集』収録学者の殆どを厳しく糾弾していた点など、拙稿「『榑桑名賢文集』の書入れ――荻生徂徠の元禄名賢月旦――」[註2]にかつて論じた通りである。『名賢文集』は周知の通り、仁斎門の林義端が江戸より西国にいたる当代の学者の漢文を輯めて五巻となし、元禄十一年に刊行した一大アンソロジーである。本書が元禄の文運隆盛を象徴する、文章の亀鑑集あるいは学者名鑑として仰がれ且つ活用されていたこと、義端が自序において本書を『本朝文粋』以来の快挙と豪語し、また筑後国柳川藩儒安東省庵が学者名検索の便に供していたと思しい、本書目録のみの自筆の写しがその文庫に残る事実[註3]などからも確認されよう。徂徠はそれをテクストに選び、収録文章の不備を片っ端から糾弾していったのである。

このように考えると、徂徠の『名賢文集』糾弾という行為は、単に仁斎批判というに留まるものではなく、近世漢文学思潮における大きな転換を予想させる、革命的な出来事であったと考えなければならないであろう。

二　もう一つの徂徠書入れ本

かくして『名賢文集』に批語を加えて、徂徠は、大家が著した漢文がいかにお粗末な代物であるか、を証明する一書を企てた。ひとまずこれら批語を『文罫』としてまとめ、更に『護園随筆』附録として見られるような姿にまで推敲を重ねて、『文戒』と命名した。批語から『文戒』までの過程には、『名賢文集』批語を徐々に仁斎・闇斎に関するものだけに絞り込み、新たに『名賢文集』未載の仁斎『童子問』『語孟字義』、および独庵玄光『溲勃』の批判を加えるといった再構成が計られている。

この再構成に、当時、勢力を誇っていた人物を攻撃することで、よ

り効果的に学界に衝撃を与えようとする徂徠の狙いがあったのは言をまつまい。万治・寛文期、学界の「十分ノ三」を闇斎学派が、次いで貞享・元禄期、「十分ノ七」を古義学派が占め、東涯の代には「大抵ハ学校カト思ハル、程」の盛況ぶりであったとは、那波魯堂『学問源流』の記述である。また、玄光は『儒釈筆陣』（寛文二年刊）で江戸の林家と詩論を戦わせて以来、『本朝四家絶句』（元禄十五年刊）で、藤原惺窩、石川丈山、元政上人らとともに挙げられるなど文名を轟かし、また徂徠自身もその思想に影響を受けたと目される人物である。[註4]

徂徠のねらいは的中し、『蘐園随筆』は人々の注視の的となった。安積澹泊が「…三戒法度森厳、其指摘仁斎下字差誤処、皆中膏肓之疾。…」（『澹泊斎文集』巻八所収「復荻徂徠書」）[註5]と、その切れ味鋭い指摘に惜しみない賛辞を贈り、福岡藩儒竹田春庵なども、本書を読んで古文辞学に関心を寄せるきっかけとしている。[註6]

さて、『蘐園随筆』執筆を後悔する念とともに、後年、徂徠は批語を書入れた『名賢文集』を長く篋底に秘め置き、人々に示すことはなかったと言う。宇野明霞の田中大観宛書牘「復田文瑟書」（『明霞遺稿』巻八所収）。その意味において、徂徠批語をそのままに写す萩野本は貴重な伝本と言えるが、昨年、杉下元明氏より、片山龍「荻生徂徠の「道」観と朱子学時代の仁斎批判」[註7]において、早稲田大学図書館蔵の『名賢文集』徂徠書入れ本の存在に言及されていることを御教示戴いた。片山氏によれば、早稲田本は嘉永三年に徂徠批語を書写した旨を記す識語がある由、またその書写者は、幕末大坂の徂徠学者・藤沢東畝である可能性を示唆されている。とすれば、この『名賢文集』批語は、徂徠周辺で連綿と書写され続け、古文辞学唱道以前の徂徠の覇気を伝えるものとして、深く記憶に留められていたものでもあろう。

三　古義堂の反撥　――荒川景元の場合――

さて、『文戒』での徂徠の指摘は「『文戒』に関する限り、仁斎は徂徠に一言もなかったであろう」[註8]とされるが、これだけの筆鋒厳しい糾弾を前にして、古義堂側が黙視していたとは考え難い。事実、例えば日野龍夫「入江若水伝資料」[註9]に紹介される、徂徠が入江若水に『蘐園随筆』二巻分の原稿を送る旨を報じた、正徳二年十月九日執筆の国字牘には次のような一節が見える。今、日野氏論文に掲載される写真版によって引用させていただくと、[註10]

一　『蘐園随筆』板行之事、前信具（つぶさにおほせこされ）被仰越候故、貴僕ニ付而浄写半（なかば）出来二巻、上セ申候。又二巻末附（ぶんかいをふし）『文戒』、都合五巻可有之（これあるべく）候。…貴僕へも申含（まうしふくめ）候通、北可昌、院中へ出入申候由、如何様ノ邪魔入レ可申（まうすべき）も難斗（はかりがたく）候。且書林剞劂ニも、伊藤門人有之（これあり）候由、妨無心元（さまたげこころもとなく）存候。タトヒ費ハ、書林いたし候共、貴様手前板と号シ、出来迄ハ沙汰無之（これなき）様ニ仕度候。…

北可昌、即ち北村篤所をはじめ、林義端など仁斎門にして書肆を営む面々の本書刊行への妨害を想定し、刊行成るまでは、表向きは若水の出資版と偽るよう指示するなど、古義堂側の動きに綿密な予防策を弄しているほどである。徂徠が憂慮する通り、古義堂内部では『蘐園随筆』に対する反撥が相当に打ち出されていたと見るべきであるが、その間の経緯は必ずしも明らかにされてはいない。

そうした古義堂側の反撥を示す一例として、『荒川景元答問』と題する写本を提示しておく。[註11]荒川景元（承応元―享保十九年）、名は秀、号は天散或いは蘭室、景元（或いは敬元に作る）はその字。東条琴台『先哲叢談後編』（文政十三年刊）によれば、八歳より古義堂に寓して

仁斎に師事し、寛文九年、十六歳のとき紀州藩に出仕した人物である。琴台は、景元が仁斎に進言して、「語孟古義」の巻首に「最上至極宇宙第一」の八文字を置くのを止めさせた逸話などを紹介して、「天散幼学二于伊藤仁斎一」、古義塾中有二千里駒之称一」と、古義堂中でも一頭地を抜く人物であったことを記しているが、これは紀州にゆかりある人物のアンソロジー『南紀風雅集』（文化十三年刊）で、景元の条にその伝を記して「学于伊藤仁斎、幼有才名」とあるのに相い呼応する。本書の編者は、仁斎の五男・伊藤蘭嶋の養子で紀州藩儒の伊藤海嶠であるから、琴台の言は信用に足るものであろう。しかし、そうした風評にもかかわらず、その俊才ぶりを伝えるべき景元の著述は散逸して殆ど残らない。琴台にしても景元の著述として唯一『敝箒集』のみを挙げるが、現在はこれとても伝存未詳である。『荒川景元答問』[註12]は、或る人物の学問に関する質問への回答一九二条をまとめたもので、厳密な意味での景元の著述とは言い難い。しかし、国字牘の文体で懇切に説き聴かせた行文からは、形式張らずに自己の見解を率直に述べる箇所が散見される。そしてこの内に『蕓園随筆』への反論が見出される箇所が散見される。

例えば、本書の中程、一〇七条目[註13]。

○『蕓園随筆』一覧申候。如何様ニも一器量有之人と相見へ申候。仁斎の学術を評シタル所、何れも穿鑿ノ説ノやうニ被存候。又、奥ノ「文戒」ノ内ニも、尤センサクノ説多ク候。又其内、難付尤成ルやうニ存候所共も御座候。右ハ『童子問』『語孟字義』などハ、語録躰ノ物ニ候ヘバ、さのみ文章ノ吟味念入不申様子ニ候ヘバ、定而吟味落シモ可有之と存候。又ハ作例拠アリテ書レタル義モ難量候ヘバ、其段ハ慥ニ是非ノ評ヲ難付存候御事ニて候。

質問者は、仁斎門の林義端編『文林良材』（元禄十四年刊）や、佐藤直方が仁斎の「送浮屠道香序」を批判した『弁送浮屠道香師序』（元禄四年刊、正徳三年の改修刻本あり）など、古義堂に関連ある書物が刊行されるごとに意見を求め、景元は懇切に回答しているが、これは『景元答問』が元禄末年、即ち景元四十～五十代以後の言説を記録したものであることを示していよう。そして『蕓園随筆』が話題に上ったのは、一〇五・一〇六条目、そこで本書中の言説について景元の意見を質し[註14]、景元の方から『随筆』の読後感を説き聞かせたのが本条である。徂徠を「一器量有之人」と評価しつつも、仁斎への批判は多くが「穿鑿ノ説」とする。また徂徠が『文戒』で槍玉に挙げた『童子問』『語孟字義』を「語録躰ノ物」とし、「さのみ文章ノ吟味念入不申様子ニ候ヘバ、定而吟味落シモ可有之と存候」と言うのは、単に仁斎の弁護ではなく、両書ともに仁斎晩年まで加筆訂正を繰り返していた事情を語るものである[註15]。まして、『語孟字義』に関して言えば、徂徠がテクストとして用いたのは、第一稿本に近い本文を持つ元禄八年版刻本であり、謂わば未定稿をもとに刊行した海賊版である。徂徠はこの意味において、景元の批判を甘受しなければなるまい。

『文戒』に「穿鑿ノ説」が最も多いと評した景元であったが、それは例えば、次のような徂徠の過失を見出していたからに他ならない。

一一二条。

○『蕓園随筆』ノ内ニ字義ニ「遊戯三昧」ト申詞ヲ和語也と有之候。右ハ成程、古語ニ有之文字ニて候。比日も『群談採餘』ノ内ニても見当り申候。『随筆』之説、粗謬ナル義と存候。其外もかやうの類多ク可有之と存候。

『文戒』「第一戒二和字一」に、仁斎「詩説」の一節「詩之一経、聖人

游戯三昧書也」を挙げて「「游戯三昧」、不レ成レ語。亦其家言」と指摘する。「家言」とは「講師経生、別有二家言一者、均之皆訛二用中華語一、実非二其義一。最堪レ惑レ人」（同所冒頭）と言うように、講釈の場で慣用される語彙を言う。既述の通り、講釈は徂徠の最も白眼視する学問形態であり、「家言」の否定もこれと揆を一にする。『文戒』で仁斎の「家言」と見なすのは「血脈」「学脈」「命脈」「肯綮」と、この「游戯三昧」なる語である。この内「血脈」は、林希逸『荘子鬳斎口義』発題、陸九淵『象山先生全集』巻三四、語録上など、彼の土の書物に前例あることを、日本思想体系33、清水茂校注が指摘するが、[註16] 景元は「游戯三昧」を『群談採餘』に用例ありと喝破した。『群談採餘』十巻、万暦二十年序刊、明の倪綰著。天文から人事までのあらゆる逸話を五十八類に分けて集録した故事集である。大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』（昭42　関西大学学術研究所）などにも記載がないが、例えば国立公文書館内閣文庫の林羅山旧蔵書中には本書が蔵せられており、これで見ると確かに景元の指摘通り、巻二「文史」類第一条の後半部に「游戯三昧」なる語を索め得る。

…近代、鷗公ガ「醉翁亭ノ記」ノ歩驟ハ「阿房宮ノ賦」ニ類シ、「昼錦堂ノ記」ノ議論ハ盤谷ガ序ニ似タリ。東坡ガ「黄鶴楼賦ノ賦」ノ気力ハ晋朝ニ同ジク、「赤壁ノ賦」ノ卓絶ハ雅風ニ近シ。則チ自来有ルコトヲ知ル。而ドモ韓文公ガ「廟記」、鐘子翼ガ「哀詞」、時ニ険怪ニ出ルハ、蓋シ游戯三昧ノ間ニ、一ニ之ヲ作レバナリ。…

徂徠一派に先んじて小説類に親む風があった[註17]古義塾では、こうした明代の随筆類も隈なく渉猟していたものであろう。

最後に一一三条。

○御書中、被仰越候「流行対待二端」ノ「有」ノ字ノ置所ノ義、成程『随筆』ノ意味も一理有之儀ニ候へども、そのまゝ仁斎ノ通りにても聞へ申候。尤文理顛倒と申ニ而も無之と存候。此レ等などいづれニても不苦儀ヲ、何がなと評論ヲ付申迄ノ儀と存候。仁義礼智信ヲ五性と申儀、韓退之已前よりも有之儀ヲ、宋儒ノ始テノ説ノ様ニ有之儀ハ、『語孟字義』ノ吟味落シノ様ニ存ル事ニ候。其外、大方『随筆』ノ説ハ、穿鑿ニ過候様ニ御事ニ候。

『文戒』「第二戒二和句一」に、『語孟字義』巻上「天道」第二条の一節「天道有二対待一、有二流行一。…然天道之所三以為二天道一、本以二流行一而言。対待者自在二流行之中一。本非レ有二流行対待之二端一也」を挙げて、傍線部の箇所は「本非流行対待之有二端也」としなければいけない、でなければ前の「有対待、有流行」と語気が対応しない、と言う。これも海賊版の未定本文を喋喋したという以上に、景元に言わせれば「穿鑿ニ過候」指摘であった。また、このように徂徠の説に反撃する一方で、後半部で『語孟字義』の遺漏をも併せて指摘している点などは、景元の中庸な学問姿勢を窺うに足るものであろう。

註

1　吉川幸次郎「徂徠学案」（日本思想体系36『荻生徂徠』〈昭48　岩波書店〉所収）七〇六頁。

2　「語文研究」第八十六・八十七合併号（平11・6）。

3　安東省庵自筆「扶桑名賢文集各人文数」（九州歴史資料館分館柳川古文書館安東家資料蔵一紙一枚）。

4　高橋博巳「独庵玄光の世界――人と文学――」（鏡島元隆編『独庵玄光と江戸思潮』〈平7　ぺりかん社〉所収）

5　『続々群書類従』（明42　国書刊行会）第十三所収。

6 『春庵文稿』（福岡県立図書館寄託竹田文庫蔵写本十六冊）第十一冊所収「読徂徠書論」など。

7 「文学研究科紀要別冊第二集　哲学・史学編」（平7・2）。

8 今中寛司・奈良本辰也編『荻生徂徠全集』（昭48　河出書房新社）第一巻所収「蘐園随筆解説」。

9 『服部南郭伝攻』（平11　ぺりかん社）所収。

10 句読点・濁点・読み仮名などを私に付した。

11 架蔵。墨付三七丁。外題「荒川景元答問」、内題「荒川景元丈答問　返簡」。外題と本文は明らかに別筆であり、装丁の具合から見て、もと仮綴じであったものに表紙を補って改装したと思しい。前後の遊紙は「和歌山区新町北組聯合会議事日誌／明治十五年六月廿三日」の裏紙を使用しており、本書が紀州の地、即ち直後に述べるように景元の仕官先の土地で転写を重ねられた一本であることを想起させる。

12 本書四一条の眉上に「此一條ハ、神戸氏ヨリ鳥井源ノ丞ニ被尋けれバ、書付候て申来リタル也。アヤマリテ書入タル也。可除也」との標記が見える。この「鳥井源ノ丞」なる人物は、既述『南紀風雅集』巻上に見える「鳥居興治」ではあるまいか。海嶠は興治について左のように記している。

　号春沢、称源之丞。其父本熊野祝司、以神道之学仕藩祖。春沢幼承其業、旁渉諸書。正享之間、遂以是荷寵眷、居顧問之職。寛保壬戌卒。年七十五。

もしそうならば、景元に飽くことなく学問を問うた質問者も、同じく紀州の人物が想定されよう。

13 引用に際しては、句読点・濁点・読み仮名などを私に付した。

14 以下、一〇五・一〇六条を参考までに掲出しておく。

○『蘐園随筆』中巻之内十二丁ノ表　「聖人モ亦人也。亦何ゾ不識夫鄭衛之声可娯之愈於雅楽焉乎…」と有之候。俗耳ニコソ、鄭衛ノ音ハ雅楽ニマサルト聞ベケレ。聖人ノ耳ニハ、淫声ノ不正ヲ面白トハ聞タマフベカラズ。近クタトヘテ見申候ニ、只今ノ上留りせつきやうと謡とのごとし。凡耳ニハ、上留り説経ノ方、うたひよりハ面白がり候へども、聞ク人ノ心気とろけ、淫声の害、忽ち覚申候。又うたひハ面白心正クして、心気とろけず候。然レバ、聖人も、雅楽よりも鄭衛ノ声ヲ面白トハ思召まじきかと被存候。実ノ心かく聞候へバ、上留り小哥よりハ、うたひの方、遙ニ面ク聞へ申候而、此事を可知にや。此条、貴存之趣、御尤至極ニ存候。『随筆』ノ旨ハ所謂「以小人之服、料君子之心」と申ものニ被存候。

○又中巻ノ内第三ノ十丁メノウラニ「大氐欲也、利也、私也、皆人之所不能無者而…」。道理ニ循フト不循トヲ分ケテ説タリ。尤、欲ト利トノ二ツハ循理事も可有之候へ共、私ノ一ツハ循理と言事ハ有まじきや。

「私」ノ字ノ義、和語ニ「内証」と申詞ニ当り申候。惣じて公儀ダチ不申候義ハ、何事も「私」字ニて候。左候へバ、私事と申迄ニても又循理事も可有之歟ニ候。

また一一一条に、

○仁斎ノ弟子ニ辺子固ト申人ハ、覚不申候。前年、田辺淳甫ト申門人有之候。其後、江戸ニて仕官被致候由、承候。若此人ニても候哉。子固ト申名ハ其人の義ニ候哉、不存御事ニ候。

と見える、仁斎門と称する「辺子固」なる人物は、徂徠が仁斎に書簡を出すに当たって仲介を願った人物。このこと『随筆』巻二に見え、質問者がその素性を尋ねたものであろう。

15 日本古典文学大系97『近世思想家文集』（昭41　岩波書店）所収「童子問解説」、日本思想体系33『伊藤仁斎　伊藤東涯』（昭46　岩波書店）所収「語孟字義解題」（ともに清水茂執筆）。

16 五一六頁、補注「血脈」の項。

17 中村幸彦「古義堂の小説家達」（『中村幸彦著述集〈昭59　中央公論社〉第七巻所収）

［附記］先行論文に関して御教示賜った杉下元明氏に御礼申し上げます。猶、本稿は平成十四年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（おおば　たくや・日本学術振興会特別研究員）